

「茶道文化」教育の教育効果に関する探索的研究

～ポスピタリティの育成に着目して～

Exploratory Study on the Educational Effect of Tea Ceremony Class

- Developing positive hospitality mindset -

川原 ゆかり、萩原 宏美、新井 浩之、廣瀬 美由紀、
座間味 愛理、安徳 勝憲

I. はじめに

I-1. 建学の精神と「茶道文化」

「古きを知りて新しきを知る」と言う諺があるが、本学の基幹科目である古くからの教えである「茶道文化」を知り、教育理念である「建学の精神」への道筋をたどってみたい。

学長は「茶道教育は地域文化伝承の教養教育であり、建学の精神は人間が誇るべき徳性とは道徳であり、人としての道を究める総合芸術である」と説く。本学の茶道教育は、鎮信流の流祖「松浦鎮信公」を拙家としており、昭和20年12月、安部芳雄によって創設された各種学校「九州文化学院」の建学の精神の中にその源流がある。建学の理念に、「近代人が持たねばならない高い知性と豊かな教養と近代的生活の改善に耐え得るたくましい意志と健康な体を養い、人間が誇るべき特性と品格の香り高さを身に付けさせようとする独特の人間教育を行う」とうたわれている。昭和22年に、「九州女子専門学校」として高等教育機関として認可されたのを機に教養教育の根幹として、茶道教育が位置づけられ、現在も「茶道文化I～IV」として唯一2年間の通年科目の中にその精神は脈々と受け継がれている。

ところで、急速に大学改革が進む中、本学の教育理念として建学の精神を具現化する機関ディプロマ・ポリシー（以下、DP）の柱を「1. 心豊かな人間力、2. 確かな専門的知識や技能、3. コミュニケーション能力、4. 課題解決能力、5. 主体的に学ぶ力」としている。

この機関DPを踏まえ各学科のポリシーがあり、教育目標を元に教育を展開している。「茶道文化」は学科に所属せず、全学科共通の基礎教養教育の中核を担う独立した部所である。茶道文化は機関DPの「心豊かな人間力」の育成を直接具現化する教育科目と考えていいであろう。その「茶道文化」の教育目標は「お点前」だけではなく、点前を通じた他者との間に生まれる「人とヒト・人とモノ」の間に生まれるものと考えられる。またその教育の意図は、社会性に必要な汎用能力となって醸成されていくものであると思われるが、現在の「茶道文化」は点前の技能の習熟度を中心として展開しており、「お点前」を通して「他者との間に生まれる関係性」の先にある社会性を意識化していないため、その明確な評価尺度が無いのが実情である。今回の教職共同研究では、「茶道文化」の教育目標を「お点前（茶室）」を通じた社会性の汎用能力の育成と捉え、それを「ホスピタリティ」の概念に置き換えて教育効果を探索したものであり、将来的には「茶道文化」の教育的意義とその教育効果の評価尺度や基準を策定し、可視化してみたい。

I-2. 茶道文化と大学教育改革

本学の茶道教育のように建学の精神の浸透をはかるための自校教育を行っている大学は私立の高等教育機関に多くみられる。その自校教育について、大川（2011）は「大学の理念、目的、組織、沿革、人物、教育・研究の現況など、自校（自学）に係る特性を教育題材として実施する一連の教育・学習活動」と定義している。自校教育が導入される背景には、①大学設置基準の大綱化に伴う教養教育の多様化、②大学理念・目的の明確化・周知の必要性、③「大学間競争時代」に対応した在校生・教職員・卒業生の愛校心・連帯意識の涵養、

④「評価者」としての学生の自学認識の促進が挙げられている。

一方、昨今の大学改革の潮流の中で、平成28年3月に中央教育審議会大学分科会大学教育部会からだされた『卒業認定・学位授与の方針（DP）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』では、「大学教育の質的転換に向け、各大学には、それぞれの教育理念を踏まえて三つのポリシーを策定し、それらに基づき、「自らの教育理念の実現にむけ、どのような学生を受け入れ、求める能力をどのようなプログラムを通じて育成するか」という観点から、大学教育の「入口」（入学者選抜）から「出口」（卒業認定・学位授与）までの教育の諸活動を一貫したものとして再構築し、その効果的な実施に努めることにより、学生に対する教育をより密度の濃い、充実したものにすることが期待される」とされている。これらのことから、抽象的である建学の精神を教育課程に組み込み、教育成果として可視化していくことが現在の高等教育機関に求められていると言える。

そのような中で本学では、長年にわたり建学の精神を学生に伝える手段の一つとして茶道文化教育を行ってきた。その教育に全教職員が関わっていることに大きな特徴がある。これまで行ってきた茶道文化教育の意義として、

- ① 学生には「本学で学ぶ意義を体感させる機会」を与える
- ② 教員には「本学の運営方針や教育活動の指針を確認する機会」を与える
- ③ 職員には「自らの職務にアイデンティティ」を与える
- ④ 卒業生には「在学中から変わらぬことを経験することで愛校心」を与える
- ⑤ 大学運営には「様々な構成員（学生・教員・職員・卒業生等）がつながる場」を与える

と定義づけることができる。これまで全学的に行ってきた茶道文化教育を、各学科のディプロマ・ポリシーと結びつけ教育課程に落とし込んで可視化していくことが、本学の茶道教育の課題である。

I-3. 近年の学生気質と課題—ホスピタリティの育成—

我々は、2年間の教育を通じて機関が決定したあるレベル（DP）まで学生を引き上げる義務があり、それを達成するために教育課程を編成している。しかしながら実際には、卒業要件（所要単位の修得）を満たせば卒業が可能であり、機関が定めた教育目標を達成したかどうかを厳密に判定している訳ではない。教育目標に挙げている人間力やコミュニケーション力などを一律に測定することは難しいため、一つのツールとして今回はホスピタリティに着目した。ホスピタリティとは人間と人間の間にも生まれる心象を表す単語であるため、コトバで的確に表現することは容易ではないが、本論では自己と他者の間に真心の触れ合いや響き合いが生じた状態と定義する。

さて、短期大学に入学してくる学生の多くは、高等学校を卒業したばかりの学生であり、同年代の3割程度が就職している現状から、社会人としてある程度の素養を内在していると期待できる。また、学生の気質（考え方・道徳心など）は彼ら自身が作り出したものではなく、時代背景を反映したものであると考えるのが妥当であろう。近年の若者気質の特徴は、自ら考え行動する能力の低下や、場に応じた言葉の使い分けができない等が挙げられるのではないだろうか。しかしながら、学生の気質は掴みどころがなく千差万別であり、時代とともに変化するものであるため、社会に通用する職業人育成を使命とする短期大学においては、不易と流行の精神に則り、ホスピタリティを含む社会性の涵養も教育目標の一つと言える。その教育目標を達成するため「茶道文化」教育があると仮定できるだろう。

I-4. 本研究の目的

以上のことから本研究では本学の人間教育の柱となる「茶道文化」教育とその効果について探索的に検討し、本学の建学の精神を具体化する「茶道文化」教育の教育効果を可視化する一つの試みとして、その指標を現代の職能人に汎用的に求められるホスピタリティの育成という視点から検討することを目的とする。

II. 「茶道文化」教育の現状と地域における役割

II-1. 「茶道文化」の授業内容

「茶道文化」は昭和51年度より「日本人の誇るべき徳性と品格を身につける教育を行う」という“建学の精神”に基づく、全学科必修の2年間の基礎教養科目である。教育体制は“少人数編成”で、教職員がAT（アシスタントティーチャー）としてかわり“学生とのコミュニケーション”を密にした教育方法である。

「茶道とは何か」「なぜ茶道を学ぶのか」を理解するために、教育の内容は「点前」と言う行為の実技指導を中心として展開してきた。（表1）。

平成18年度には文部科学省の「特色ある大学支援プログラム（特色GP）」に「地域文化継承を核にした現代教養教育の展開」が採択され、その後一般常識や和室での心得、マナーなども教育に取り入れている。

表1 平成28年度 茶道文化 授業内容

教育の目標	1. 日常生活に茶道の精神を取り込み、真の教養が身につく教育を行う 2. 教員と学生、学生と学生の信頼関係を築き、クラスアドバイザー制によるきめ細かな教育指導を行って、学生生活の充実と、学生個々の学びへの主体性を養う。 3. 卒業後の進路(就職・進学)を明確にする専門分野を通じたキャリア教育を行う 4. 地域を媒介とする研究活動に積極的に参加し、地域の人々との交流を深め、地域の一員としての自覚を高める				
学科	全学科	食物科 保育学科	国際コミュニケーション 学科	全学科	全学科
開講期間	1年前期(週1)	1年後期 (週1)	後期後半 (週2)	2年前期	2年後期
講義科目 名称	茶道文化Ⅰ (社会人基礎入門A)	茶道文化Ⅱ		茶道文化Ⅲ	茶道文化Ⅳ
単位数	1単位	1単位		1単位	1単位
演習 指導体制	学生252名(教員:43名)	学生172名 (教員:30名)	学生71名 (教員:15名)	学生231名(教員:43名)	学生224名(教員:42名)

学科	全学科	食物科 保育学科	国際コミュニケーション 学科	全学科	全学科
目標	①茶道文化で身に付けたマナーや礼法を、茶室以外の生活の中でも実践できるようになる。 ②日本の礼儀作法を学び相手を思いやる行動ができるようになる。 ③日本の文化を学び、謂れなどを知り、関心を持つようになる。(自国文化の再確認) ④箸の使い方や掃除の仕方を知り、実践できるようになる。 ⑤茶の歴史を知り、自分に置き換えて行動できるようになる。(異文化交流に役立てる)	①薄茶点前の割り稽古により、一人で薄茶点前ができるようになる。 ②季節の移ろいを感じるようになる。禅語の意味を理解できるようになる。 ③茶会に関する基本的な知識を学び、理解を深めることができるようになる。 ④茶道点前を通して身に付けたマナーや作法を、学校や生活の中で役立てることができるようになる。 ⑤茶道大会に参加し、自分の役割は責任を持って果たすことを目標とする。	①濃茶席で使用する茶道具の名称や使用方法を学び、正しく使用できるようになる。 ②地域の伝統文化である鎮信流の濃茶点前ができるようになる。 ③亭主と客の心得などを習得し、心遣いを生活の中で役立てることができるようになる。 ④茶道の歴史を学び、鎮信流について説明することができるようになる。 ⑤茶道点前を通して、家庭や社会生活で役立つマナーを身に付けることを目標とする。	①点前の練習を重ね、薄茶点前、濃茶点前がスムーズにできるようになる。炭点前を学ぶ。 ②季節に応じた茶室・茶道具のあしらいに気付くことができるようになる。 ③茶道文化の授業を受けることにより、和室で自然な立ち居振る舞いができるようになる。 ④茶道大会の茶席運営に参加し、自分の役割は責任を持って果たすことを目標とする。 ⑤茶道を通して身に付けた茶の心を、学校や生活の中で役立て、相手の気持ちを理解できるようになる。	
授業概要	日本の礼法・風炉薄茶点前(鎮信流)・煎茶の入れ方	風炉薄茶点前・着付け体験・立礼点前・茶道大会への参加・初釜・松芳忌・茶道の歴史	風炉濃茶点前・茶会の流れと花寄せ・茶道の歴史・ミニ茶会	炭点前・炉濃茶点前・風炉濃茶点前・立礼点前・風炉薄茶点前・茶道大会への参加・初釜・松芳忌・卒業記念茶会(別れの茶会)	
講義概要	①茶室は神聖な場所であることを理解する。茶の心を学び、先生を敬い、相手を思いやり、自らを慎む。 ②礼法(座礼、立礼)を覚える。和室での心得を学ぶ。(毎回反復練習をする。) ③茶室に必要な道具名を覚える。点前道具の名称を覚える。道具を大切に扱う。 ④風炉薄茶点前を一人で出来るようになる。	①風炉薄茶点前を一人で出来る。 ②茶花について学ぶ。禅語について学ぶ。 ③大寄せの茶会の心得を学ぶことができる。茶会の客の作法を学ぶことができる。季節と客組みを学ぶことができる。 ④上座、下座を学ぶ。学んだ礼法を日常でも使うことができる。和室での立ち居振る舞いを身に付けることができる。	①濃茶点前の道具名を覚える。薄茶点前と濃茶点前の違いを知る。濃茶点前の道具の使用方法を覚える。 ②仕覆の扱いを覚える。水次の扱いを覚える。濃茶の練り方を学ぶ。 ③亭主と客の動きを学ぶ。相客間の心構えを学ぶ。茶花に関する知識を深めることができる。 ④武家茶について学ぶ。鎮信流を日でも使うことができる。和室での立ち居振る舞いを身に付けることができる。	①風炉濃茶点前を一人で出来る。炉濃茶点前を覚える。美味しい濃茶を練るようになる。 ②季節豊盛かな茶花の種類を知る。正月の床飾りを学ぶ。法事の床飾りを学ぶ。 ③和室での歩き方を学ぶ。繰り返しにより自然な動きを身に付けることができる。着物の種類について学ぶ。 ④地域文化の継承に貢献する。茶道大会で自分の役割を果たす。自己の修養、自己の成長を学ぶ。	

学科	全学科	食物科 保育学科	国際コミュニケーション 学科	全学科	全学科
講義概要	⑤茶の歴史を学ぶ。鎮信流について学ぶ。	⑤前年の茶道大会の映像を見て学ぶ。色々な役割を知ることができる。自分の役割の練習を行い茶道大会に参加する。		⑤上座、下座を理解し、家庭や実習先でもマナーに気を付けるようになる。言葉遣いに気を付けるようになる。	⑤人や物を大切にする。おもてなしの心を学ぶ。授業最終時には、別棟の茶室(耳順亭)で茶会の流れを学ぶ。
評価の方法 (筆記と実技 の割合など)	関心・意欲・態度(茶道文化の授業に積極的に参加し、講義は真面目に受けているか。)授業態度:15%				
	思考・判断(教科書や学習帳で予習、復習をし、講義の内容を分かりやすくまとめているか。)学習帳の利用:10%				
	知識・理解(お茶の心や鎮信流の基礎的な知識を得ているか。日常生活に役立っているか。)行動や感想:15%	知識・理解(お茶の心や鎮信流の基礎的な知識を得ているか。日常生活に役立っているか。)筆記試験:60%		知識・理解(お茶の心や鎮信流の基礎的な知識を得ているか。日常生活に役立っているか。)行動や感想:15%	知識・理解(お茶の心や鎮信流の基礎的な知識を得ているか。)筆記試験:60%
	技能・表現(薄茶点前を正確にできるようになったか。)実技試験:60%	技能・表現(薄茶点前を正確にできるようになったか。茶道大会への参加状況)行動や感想:15%		技能・表現(濃茶点前を正確にできるようになったか。)実技試験:60%	技能・表現(濃茶点前を正確にできるようになったか。身に付けたマナーや作法を日常生活で生かしているか)行動や感想:15%

II - 2. 地域における役割と教育効果の広がり

昭和51年度より地域交流のツールとして位置づけた「茶道大会」は40回を迎え、「おもてなしの心」を込めて地域の方々に鎮信流のお点前を披露しているが、着物姿のあてやかな学生たちはすっかり佐世保の風物詩になっている。近年、グローバル化の流れの中で国際教育が盛んになり、本学の茶道教育は①地域交流、②国際交流、③高大連携、④地域貢献の4つの重要な機能を充実させながら発展してきた。近年日本の伝統的な文化伝承の場であるとともに、高大連携、国際交流の場としてそのニーズはますます高くなってきている(表2)。

表2 平成28年度 茶道文化 地域関連行事

①地域交流	第40回 茶道大会濃茶席・立礼席・点心席(玉屋・富士国際H) 第31回 長崎短期大学白蝶祭にて濃茶席・薄茶席(不文軒) 第21回 茶道大会にて釜山女子大学と茶道交流(富士国際H)	第19回 九州文化学園 年中組お茶ごっこ①～⑤(九文幼稚園・長崎短期大学不文軒) 第19回 九州文化学園 年長組お茶ごっこ①～⑤(九文幼稚園・長崎短期大学不文軒) 第11回 九州文化学園 キッズフェスティバルで呈茶(九文幼稚園) 第2回 黒島にて いきいきサロン点前披露(黒島)
②地域の国際交流関係	第21回 韓国釜山女子大学学園祭にて鎮信流点前披露(韓国釜山女子大学) 第11回 アメリカンスクール茶道交流(不文軒) 第5回 アメリカ人(JLCP)茶道体験①～④(不文軒)	第4回 禅寺にて留学生が呈茶(波佐見町東前寺) 第3回 韓国釜山観光高校茶道体験①～⑥(不文軒) 不定期 米軍の奥様方茶道体験(短大茶室洗心庵)
③高大連携	大村城南高校 茶道体験(不文軒) 平戸高校 茶道体験(不文軒) 波佐見高校 茶道見学(不文軒) 黒島小学校児童 茶道体験(不文軒) 高校生へ茶道紹介 オープンキャンパスにて(不文軒)	茶道文化授業風景見学(不文軒) 保護者会にて呈茶(不文軒) ミスユニバースビューティキャンピングにて茶道体験(不文軒) 大村城南高校PTA 茶道体験(不文軒) 台湾慈明高校 茶道体験(不文軒) 韓国倍材大学 茶道体験(不文軒)
④その他、地域貢献	茶と花の融合展 花展席・濃茶席(アルカス佐世保) ハイスクール茶会(ハウステンボス) 梶の会点前研修会(長崎国際大学自明堂) 松清会 初釜(アルカス佐世保) 東茶古典セミナー 総会・茶作り(南地区公民館) 松清会 総会(アルカス佐世保) 地域連携(AP)茶道見学(不文軒)	茶道部マイ茶碗作り(三川内 蛇黨の会) 短大生対象 初釜(不文軒) 短大生対象 松芳忌(不文軒) 短大2年生対象お別れの茶会(耳順亭) 食物科卒業記念 フルコース前にて呈茶(ラウンジ) 放課後夜茶 茶道文化授業担当者(耳順亭・不文軒・洗心庵) 茶道部活動 週2回(不文軒)

このような流れの中、教育効果の広がりが確認されている。今年度末に実施した授業の到達目標とテーマについてのアンケート調査の結果では、1年2年ともその効果が学校生活や茶道大会でも発揮できたことが窺える(表3)。

表3 茶道文化に対する学生の授業アンケート結果(一部抜粋)

質問1. 茶道を通して身に付けたマナーや作法を学校や生活の中で役立っていますか。								
1年	非常に:	10.5%	かなり:	44.8%	まあまあ:	42.9%	少し:	1.8%
2年	非常に:	34.4%	かなり:	48.4%	まあまあ:	17.2%	少し:	0%
質問2. 茶道大会の茶席の運営に参加して、自分の役割は責任を持って果たしましたか。								
1年	非常に:	36.2%	かなり:	39.0%	まあまあ:	21.9%	少し:	2.9%
2年	非常に:	54.8%	かなり:	30.1%	まあまあ:	14.0%	少し:	1.1%

茶道を通して身につけたマナーなどを学校生活に役立てているかについて、1年生が「まあまあ」が半数であるのに対して、2年生は「非常に」や「かなり」が大半を占め、マナーや作法を意識し始めていることが読み取れる。また、地域文化の継承、1年間の茶道の授業のお披露目の場でもある茶道大会における学生の責任感においても2年生がより強く、2年間の成長が読み取れる。

Ⅲ. ホスピタリティの育成からみた「茶道文化」の教育効果

Ⅲ-1. ホスピタリティから見た学生理解

「ホスピタリティ尺度」を用いて、短大生のホスピタリティの習得度を理解することを目的として、平成28年度に在籍する本学全学生を対象に、本学が運営するポータルサイトでアンケート調査を行った。時期は平成28年11月～平成29年2月であり、学籍番号を記入する形式をとった。ホスピタリティ尺度は、平成17年より本学で「ホスピタリティビジネス」を担当する安徳により独自に作成された尺度を用いた。質問は、「たいていの人とはうまく付き合える」「いつも相手より先に挨拶をしている」「自分の話より相手の話を聴くことの方が多し」など自分自身と他者との間に生まれる心象、態度、行為を問う全25項目で構成されている。回答は、「そうではない(1点)」「ややそうではない(2点)」「まあまあそうである(3点)」「そうである(4点)」の4件法で求めた。点数が高いほど、ホスピタリティの態度を有していると捉える。その結果と考察を以下に記す。

①回答者について

対象学生503名中、科目履修生と交換留学生、欠損値の多い回答計34名を除き469を分析の対象とした(有効回答率は93.2%)。各学年と所属、性別を表4に示した。

表4 回答者について

		食物科				保育学科				国コミ		専攻科		合計
		調理 コース	製菓コース		栄養士 コース	保育専攻		介護福祉 専攻						
		2年	2年	1年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	1年	2年	
性別	男性	18	6	3	2	2	6	3	1	13	18	1	1	74
	女性	9	20	11	32	100	98	7	15	45	51	2	5	395
合計		27	26	14	34	102	104	10	16	58	69	3	6	469

②「ホスピタリティ尺度」の因子分析

「ホスピタリティ尺度」について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。負荷量と寄与率から23項目3因子を抽出した(表5)。

表5 ホスピタリティ尺度の因子分析結果

<項目>	因子負荷量		
	I	II	III
I 自己への充実感・効力感 ($\alpha=.821$)			
16 これまで充実した人生を送ってきたと思っている	.747	-.087	-.027
21 気力、体力、意欲において、今の生活に満足している	.746	-.078	-.022
1 今の自分の生き方に満足している	.724	-.192	-.070
20 少々のことでは落ち込まない性格である	.630	-.087	-.064
11 自分はこれまで周りの人に必要とされてきた人間だと思う	.526	.148	-.046
15 自分は引込み思案なほうではないと思う	.501	.145	-.139
19 たいいていの人とはうまく付き合える	.411	.299	-.031
6 たいいていのことは人並みにやれると思っている	.369	.146	.092
II 他者に開かれた行為 ($\alpha=.786$)			
14 どんなに小さなことでも、必ず相手にお礼を伝えるようにしている	-.232	.739	.012
17 人の気持ちのちょっとした変化に気づくほうである	-.065	.640	-.006
9 お年寄りや子どもには優しいほうだ	-.021	.606	.049
18 いつも相手より先に挨拶するようにしている	.167	.511	-.770
24 親しみやすい人柄だとよくいわれる	.261	.494	-.106
12 人からの相談事や悩み事を打ち明けられるほうである	.062	.483	.074
4 困った人を見たら手を差し伸べるほうである	.101	.483	.035
23 受け取ったメールにはできるだけ早く返信するようにしている	.021	.365	.075
8 間違ったことは素直にその場で訂正することができる	.273	.333	-.074
13 相手によって話し方や使う言葉を変えている	-.104	.310	.129
III 他者受容的態度 ($\alpha=.722$)			
3 自分が話すより、相手の話を聴くことのほうが多い	-.102	-.046	.719
2 相手の話題に異論をさしはさまないで聴けるほうである	-.103	.166	.649
5 不平不満の他人にぶちまけることは少ない	.090	-.012	.614
7 相手の話がまどろっこしいと思うことはあまりない	.194	.004	.403
10 ふだんイラだっているようなことはあまりない	.283	.085	.364
	因子間相関		
	I	II	III
	II	.614	
	III	.283	.355

第1因子 ($\alpha=.821$) は“これまで充実した人生を送ってきたと思っている”などの8項目からなり、自分の人生や生き方への肯定感と考えられた内容から“自己への充実感・効力感”と命名した。第2因子 ($\alpha=.786$) は“どんなに小さなことでも、必ず相手にお礼を伝えるようにしている”“人の気持ちのちょっとした変化に気づくほうである”という10項目からなり、その内容から“他者に開かれた行為”と命名した。第3因子 ($\alpha=.722$) は、“自分が話すより、相手の話を聴くことのほうが多い”という内容から“他者受容的態度”と命名した。また、本尺度で得られた合計得点を「ホスピタリティ得点」とした。

③ホスピタリティの性差

性差を検討するために、ホスピタリティ得点と各因子得点についてt検定を行った。その結果、すべての因子において有意差が見られた。ホスピタリティ得点は、男性の方が女性よりも高いことが示された ($t(443)=14.96, p<.01$)。詳細を表6に示す。

本学の学生は男性の方が女性に比べホスピタリティが高い傾向にあった。母数の違いや標準偏差の大きさはあるものの、対人専門職を志す男子学生は他者への意識が高く、受容的な態度をとれる者が多いと推察される。近年は保育職に就く男子学生が少しずつ増え、女性職場における男性の役割が注目されていることも背景にある。本学で培われた男子学生のホスピタリティが就職後も発揮できるような教育が期待されよう。

表6 ホスピタリティ得点における各因子得点の平均値の比較(括弧内は標準偏差)

	男性(N=68)		女性(N=377)		t値
I. 自己への充実・効力感	2.83	(0.65)	2.66	(0.51)	2.10 *
II. 他者へ開かれた行為	3.02	(0.55)	2.98	(0.41)	0.55 **
III. 他者受容的態度	2.92	(0.67)	2.76	(0.52)	1.88 **
ホスピタリティ得点	67.46	(12.23)	64.87	(8.48)	1.67 **

** $p<.01$ * $p<.05$

④ホスピタリティの学年差

学年差を検討するために、ホスピタリティ得点と各因子得点について対応のないt検定を行った。その結果、どの因子得点も有意差は無かった。

結果より、ホスピタリティは1年生と2年生は同程度のホスピタリティを有していることが示された。本尺度で捉えられたホスピタリティは、修学の1年間の学びの成果としては捉えにくく、時間を経てゆるやかに形成されていくものとして考えられる。また、今回の検討では同一人物の教育効果としては測定できなかったため、今後は個人間の変化を検討していく必要があると考えられた。

⑤ホスピタリティの学科差

学科における尺度得点の差を検討するために、ホスピタリティ得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。検定の結果、「自己への充実・効力感因子」について1%水準で有意な差が見られた (F (11, 434) =2.795、p < .01) (表7)。多重比較 (Tukey 法) の結果、国際コミュニケーション学科の1年生と2年生は食物栄養士コースの1年生よりも自己への充実や効力感が高いことが示された。

国際コミュニケーション学科は、グローバルに活躍できるコミュニケーション能力と専門性を兼ね備えた人材育成を掲げており、語学力の向上や留学経験などの数値に見えやすい自己評価により満足度の高い学生が在籍していると考えられる。一方、栄養士コースは平成28年度に新設されたコースであり、卒業前の国家資格の取得というゴールが少し先に設定されていること、短期的に充実感や効力感を自己評価する視点が未確立であることがその差にあると考えられる。

表7 学科別における自己への充実・効力感の分散分析の結果

	食物科			保育学科				国コミ		専攻科		F値 (df)	
	調理 コース	製菓 コース	栄養士 コース	保育専攻		介護福祉 専攻		2年	1年	1年	2年		
	2年	2年	1年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年		
1. 自己への 充実・効力感	2.65 (0.54)	2.65 (0.49)	2.69 (0.57)	2.35 (0.51)	2.66 (0.52)	2.64 (0.51)	2.97 (0.55)	2.68 (0.47)	2.89 (0.62)	2.82 (0.53)	2.44 (0.09)	2.66 (0.52)	2.80 (445)
	平均値												食物栄養1年 < 国コミ1年 **
	標準偏差												食物栄養1年 < 国コミ2年 **

**p<.01

ホスピタリティの尺度を用いて、短大生を客観的に捉えることを試みた。今回は一般的な値と比較することができなかつたため、本学の学生像を的確に捉えることには限界があるが、本学においては男性の方がホスピタリティが高い傾向にあること、ホスピタリティは全体的には1～2年の期間で大きく変化しない様相を有していることが示唆された。しかし、「充実感・効力感」では、語学力の向上や留学経験などによって自己の成長を捉えやすい国際コミュニケーション学科では変化の指標として捉えられる可能性が見えてきた。

Ⅲ-2. ホスピタリティ尺度得点と「茶道文化」の成績との関連

「ホスピタリティ尺度」を用いて、短大生のホスピタリティの習得度と茶道文化教育の成績と学生自身による到達目標の達成度との関連を検討した。対象は茶道文化を履修する学生 (専攻科保育専攻の学生を除く) であった。測定内容は、①ホスピタリティ尺度 (Ⅲ-1. と同様)、②教員評価による茶道文化Ⅱ・Ⅳの成績評価を用いた。成績は、平成29年2月に後期の成績として学生に開示された素点であり、1年生は「茶道文化Ⅱ」、2年生は「茶道文化Ⅳ」の成績を用いた。なお、成績は出席点や試験結果など総合評価であるため、成績に関する項目ごとの点数を扱うことにした。③学生の自己評価による茶道文化Ⅱ・Ⅳの到達目標の達成度 (上記の茶道文化の授業において、15回目の授業で学生自身が「到達目標についての達成度」 (表1を参照) を1～5点で評価を行った) を用いた。結果と考察を以下に記す。

①ホスピタリティと茶道文化の成績との相関

ホスピタリティ得点と茶道文化の成績について Pearson の相関係数を算出した。その結果、学生全体、学年別、学科コース別のいずれも有意な相関は示されなかつた。このことから、ホスピタリティが高い学生でも茶道得

点が低い場合があることなどホスピタリティと茶道の成績評価との関連がないことが示唆された。茶道文化で評価される項目は、出席や実技試験の結果などのホスピタリティ尺度で捉えられる要素以外の内容が含まれているためと考えることができよう。更に、成績評価は、教員によって評価されるため、ホスピタリティのもつ自己評価との不一致が生じている場合も考えられた。

②ホスピタリティと茶道文化の到達目標の達成度との相関

ホスピタリティ得点と学生の自己評価による茶道文化の到達目標の達成度について Pearson の相関係数を算出した。その結果、学科コースによっては中程度の相関が示された(表8)。製菓コースの学生は、茶道の到達目標を達成できたと感じている者ほどホスピタリティも高く、特に1年生は他者へ開かれた行為を有していることが窺える。これより、茶道文化の授業を通して達成感を持つことがホスピタリティの側面を高められる可能性が示唆される。しかし、学科によっては関連が見られないことから、茶道教育で何を身につけるのかというホスピタリティとの意識づけ、方向づけが今後の課題となるであろう。

表8 ホスピタリティ尺度因子と茶道到達得点との相関

	食物科				保育学科				国コミ	
	調理コース	製菓コース		栄養士コース	保育専攻		介護福祉専攻			
	2年	2年	1年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
ホスピタリティ合計得点	.516	.553*	.678*	.009	.211	-.121	-.362	-.188	.274	-.186
I. 自己への充実効力感	.571*	.403	.382	-.035	.275*	.070	-.233	-.099	.026	-.173
II. 他者へ開かれた行為	.411	.121	.773**	.162	.150	-.206*	-.518	-.001	.296	-.096
III. 他者受容的態度	.356	.522	.585	-.182	.008	-.168	-.163	-.461	.386*	-.167

**p<.01, *p<.05

ホスピタリティの尺度を用いて、「茶道文化」の成績との関連を客観的に捉えることを試みた。ホスピタリティと「茶道文化」成績との関連が捉えられなかったことについては、ホスピタリティの側面を評価する視点が茶道文化の成績評価に含まれていないことが考えられた。茶道文化教育において、他者を思いやるという教育的意図は当然のこととして含まれているものの、それをアセスメントし評価する指標がこれまで議論されにくかったと言えるのではないか。学生のホスピタリティが茶道文化教育の中でどのような指標で可視化されるべきか今後の課題となるだろう。

Ⅲ-3. 「茶道文化」から学んだこと (1) —在学生の自由記述からの検討—

「茶道文化」の教育効果として、ホスピタリティ及び社会人基礎力に関連した学びの意識について検討した。方法と手続きとして、茶道文化Ⅱ・Ⅳを履修した学生(専攻科保育専攻の学生を除く)を対象に得た、「茶道文化を終えた感想」(A4用紙1枚の自由記述)を各学科6名~10名、計70名を無作為に選んだ。その後、筆者ら4名の教職員で「ホスピタリティ」に関する記述、「社会人基礎力」に関する記述を抽出した。判断に迷う記述は、その場で協議を行い検討した。

結果を表9に示す。全体的には具体的に身についたお点前の方法や、マナー、茶道大会の感想が目立った。その中で、「ホスピタリティ」に関する記述は、23名(33%)から得られた。具体的には「自信がついた」「自分の役割をしっかりと果たすことができ、今までに味わったことのない気持ちになった」という達成感、「裏方の変り加減が分かり、感謝するようになった」という共感性が多く、もてなす側と客との間に生じる心の触れ合いを感じられたという記述であった。一方、「社会人基礎力」に関する記述は、42名(60%)から得られた。特に、「コミュニケーション力」に関する記述が多く、「友人と協力して練習した」「相手と息を合わせて動くこと」に関する学びが得られていた。在学生の自由記述からは、ホスピタリティよりも社会人基礎力に関する力が意識されやすいことが示された。特に他者との協力や相互に教え合うという内容が多かったことから、茶

道教育に取り入れられている「少人数制」「アシスタントティーチャーの配置」の手法が学生の「コミュニケーション力」の学びとして意識されたと考えられる。

表9 在学生が茶道文化から学んだことから得られた「ホスピタリティ」と「社会人基礎力」

	食物科		保育学科			国際コミュニケーション学科		合計
	1年(n=13)	2年(n=11)	保育専攻		介護福祉	1年(n=10)	2年(n=10)	
			1年(n=10)	2年(n=10)	2年(n=6)			
ホスピタリティ	1	2	5	5	4	3	3	23(33%)
社会人基礎力	3	5	6	10	6	6	6	42(60%)
①心豊かな人間性	1	0	2	2	4	2	4	15(21%)
②確かな専門的知識や技能	—	—	—	—	—	—	—	—
③コミュニケーション力	0	5	2	4	5	3	2	21(30%)
④課題解決能力	1	0	1	3	1	1	0	7(10%)
⑤主体的に学ぶ力	1	0	1	1	1	0	0	4(6%)

Ⅲ-4. 「茶道文化」から学んだこと (2) —卒業生アンケートからの検討—

「茶道文化」の教育効果として、就職後に役立ったこと（学びの意識）について検討した。方法として、本学園グループのA幼稚園とB保育所で勤務している本学の卒業生に対し、アンケートを実施した。結果を表10に示す。

表10 長崎短期大学卒業生21名の回答結果(保育職従事者)

1. 社会人歴		平均9.5年
2. 保育歴		平均7.2年
3. 茶道文化の授業に満足していたか	(1)とても満足	5(24%)
	(2)やや満足	10(48%)
	(3)どちらとも	6(29%)
	(4)やや不満	0(0%)
	(5)とても不満	0(0%)
4. 社会人になって茶道文化の授業は何か役に立ったか	(1)とても役立った	4(19%)
	(2)やや役立った	13(62%)
	(3)どちらとも言えない	3(14%)
	(4)あまり役立たなかった	0(0%)
	(5)まったく役立たなかった	1(5%)
5. 役に立った事	礼儀マナー、立ち居振る舞い、おもてなし・心遣い	
6. もっと学んでおけばよかった事	言葉遣いや礼儀作法、着付け、お点前	

5. 6. は自由記述であり、回答の多かった上位を記載

「授業への満足度」、「社会人になって授業は役立った」に関しては70%以上が肯定的にとらえている。また、「役に立ったこと」、「もっと学んでおけばよかった事」の内容は、礼儀作法が上位であり、茶道＝礼儀教育という認識が根底にあるのではないかと推察された。

Ⅳ. 総合考察

布笠(2008)は奥田正造における茶道教育思想の構造について、以下のように述べている。

現代の日本社会におけるモラルの崩壊や様々な社会的問題が著しくなる中で、道德教育の必要性と共に、宗教教育や宗教的な情操について教える必要性をいうようになった。しかし、それは言葉や理論のみでは示すことができず、特定の宗教や教養を超えた身体レベルの教育が、今こそ求められている。知識や理論を教え込むだけでなく、身体レベルにおける「感性」をうながすことが必要であり、その為には実践的な体験を含めた教育が行われなければいけない。湯浅泰雄氏は著書『身体論』の中で、「真の哲学的知というものは、単なる理論的思考によるものではなく、「体得」あるいは「体認」によってのみ、認識できるものであると

いうところにある。「身体」と「精神」の相互作用によって、本来的な「知識」がかたちづくられることを示唆している「型」を模倣し、繰り返し身体の修行を積むことによって精神の習熟に至ると考える芸術論も、身体的体得による人格形成を前提として展開していると考えられる。

(下線は筆者が追加)

型から入り型に終わると言われる「茶道」の道(どう)の目的をここに見出すことができる。学生たちは、茶道の点前の型を模倣し、身体の修行を通して精神性を高めている。今回の研究を通して明らかになったことは、これまでの「茶道文化」は己と向き合い、己を高める精神修養中心で、品格を問い、自己成長を促すもので、自己の在り方が中心の教育であった。教育の理念である建学の精神とはもっと広く高い概念と思われるが、建学の精神の達成レベルは数値化が困難である。そこで茶道の精神である点前を通した「周りの人・モノ」つまり「他(者)」を意識化した、「ホスピタリティ」の概念を介在させ、ホスピタリティを客観的に評価軸にすることで建学の精神の具現化を検証しようと試みたものである。

本研究では、ホスピタリティの定義を「人間と人間の中に生まれる心象」(安徳)と仮定し、全学科の学生を対象にホスピタリティの習得度調査を実施した。ホスピタリティの構造を“自己への充実感・効力感”“他者に開かれた行為”“他者受容的態度”と捉え、ホスピタリティの性差については、男性の方が女性に比べ高い傾向にあった。母数の違いや標準偏差はあるものの、本学の対人専門職を志す男子学生は他者への意識や受容的態度が高い者が多いと推察される。学科差では、国際コミュニケーション学科の1・2年生は食物科栄養士コースの1年生より自己への充実や効力感が高いことが分かった。これは、語学力の向上や留学の経験を通して自己の成長を捉えやすいからではないかと思われた。ホスピタリティ尺度得点と茶道文化の成績との関連性は学生全体、学年別、学科コース別のいずれも有意な相関は示されなかった。茶道文化の成績は、茶道の技能(お点前の実技)や知識他出席点、姿勢や落ち着きなどの総合評価であり、ホスピタリティ以外の要素が多いためと考えられた。また、成績は教員評価のため、学生の自己評価との不一致が生じている事も考えられる。そこで、ホスピタリティと茶道文化の到達目標の達成度との関連を見てみると、製菓コースの学生は茶道文化の到達目標を達成できたと感じている者ほどホスピタリティが高く、特に1年生は他者へ開かれた行為を有していることが窺え、ホスピタリティの育成という視点では、学科の教育目標や教育内容との関連性も考慮しなくてはならない要因であると考えられた。

学生の自由記述の中でホスピタリティ及び社会人基礎力に関連した学びを見てみると、お点前の方法やマナーを挙げる学生が多い中、地域の方々のおもてなしを具現化した茶道大会を通して、自分自身に対する自信や役割意識、達成感、協調性・助け合いなど、もてなす側の学生同士の心のふれあいと共に、客との間に生じる心象が感じられる記述が3割以上の学生に見られた。学生はホスピタリティの概念は意識化こそしていないが、6割が社会人基礎力の獲得を意識していると考えられ、「相手」を意識化したコミュニケーション力を学び、成長している姿が見て取れる。この効果は、学生と学生、学生と教職員間の濃密な人間関係による教育効果と考えられる。「茶道文化」は「お点前」の身体的体得を通して人格形成を目指しているが、指導と評価は点前の技術を軸としており、人格形成としての「ホスピタリティ」にさほど注力していないが、学生にはホスピタリティ意識が育っていると見えよう。

V. 今後の課題

本学独自の2年間の通年科目としての「茶道文化I～IV」は基礎教養科目として建学の精神を具現化する基幹科目である。短期大学での2年間の「お点前」の習得時期は社会人基礎力を培う初期・導入期にあたり、社会人になってもマナーや礼儀作法として息づいている。しかし、茶道の「お点前」はホスピタリティ意識の具体的手段の一つであり、「人対人」と言う人間性に特化した手厚い「おもてなしの在り方」として今後はさらに進化と深化(内面)を必要とするものであろう。「他者を思いやる」という教育的意図や目標は当然教育の中に含まれているものの、それをアセスメントし評価する明確な具体的指標が無い場合、今後の方向性として、

茶道教育の教育効果に関する全学的議論とその教育目標を学生と教職員が意識化・共通認識化することにより、建学の精神を具現化する「ホスピタリティ」としてその教育効果を可視化することであろう。

VI. 参考文献

- 布埜 千加子（2008）「奥田正造における茶道教育思想の構造について～身体的体得による感性の覚醒をめぐって～」 美術教育（291）156-157.
- 大川一毅（2011）「大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究」
平成 20 ～ 22 年度科学研究費補助金基盤研究成果報告書.